

織田・毛利戦争と淡路

中 平 景 介

はじめに

淡路は大坂湾・播磨灘・紀伊水道の結節点に位置していることから、海運の発達にとどまらず軍事行動の渡海拠点ともなった。特に、天正四年（一五七六）から十年までの織田・毛利戦争においては、大坂湾の海上軍事における淡路の重要性、とりわけ岩屋（淡路市）¹⁾が毛利氏と雑賀衆との連携や織田氏による東瀬戸内海の制海権掌握において重視されたことが指摘されている。また、天正九年の織田勢による淡路制圧についても関係史料の年次が整理された²⁾。このように当該期の東瀬戸内の軍事情勢を把握する上で淡路が注目されているが、近年の研究の中心は織田・毛利戦争初期と終期であり、戦争全体における淡路を焦点とした検討は行われていない。『毛利輝元卿伝』³⁾が織田・毛利戦争を評述する中で淡路に多く言及し、『兵庫県史』⁴⁾にもまとまった記述があるが、織田・毛利戦争の各地域の研究が進み、⁵⁾関係史料の年代比定に見直しの必要が生じている。さらに、史料集の刊行により史料的环境が整い、当該期の淡路を把握しやすくなった。以上の研究動向から本稿は、織田・毛利戦争における岩屋も含めた淡路の位置付けを、岩屋の菅重勝や洲本（洲本市）の安宅神五郎ら国衆の動向を踏まえながら検討する。

固衆は、雑賀衆と合流した後、摂津木津浦で織田方警固「三百余艘」を壊滅させた（『毛利家文書』『戦瀬』四六〇、『信長記』九）。

その後毛利氏は、十月に大坂への兵糧再搬入について、少数の警固でも「淡路儀此方無等閑」ことから、兵糧搬入は容易と認識している（『小笠原文書』『鳥取』一一〇六）。この段階での安宅神五郎らの去就は定かでないが、木津浦海戦によつて織田方の海上軍事力が無力化したことから少なくとも敵対姿勢は示さなかったであろう。ただし、本願寺や義昭側は岩屋への信長方の調略を警戒して毛利方に早期の番衆派遣を求めており（『吉川家文書之二』八四、四九六）、宇喜多直家も「淡路辺相抱候内」の軍事行動を要請している。これを受けて毛利氏は、岩屋あるいは淡路の安定的な確保を目的の一つとして、翌天正五年の「海陸行」において大規模な警固衆の派遣を計画する。

〔史料1〕記録御用所本「古文書集」『兵九』四二四頁

熊申入候、内々被对公儀、別而被遂御馳走候、尤肝要候、当春海陸可被及御行之条、〔安宅〕神五郎殿可披抽御忠儀事、專

一候、諸警固可指上之間、旁以弥御入魂可為本望候、就其、〔輝元〕輝元被用一札候、毎事皆加賀入道殿任伝達候、仍太刀

一腰金覆輪・馬一疋進之候、寔表祝儀計候、猶期来喜候、恐々謹言

天正五年
正月十日 隆景判

〔米田〕舟越左衛門大夫殿

御宿所

淡路倭文庄田（南あわじ市）の船越景直が内々に公儀への馳走を申し出たことに対して、小早川隆景は海陸行における安宅神五郎の忠義を求めている。前年から与同していた菅重勝は淡路における毛利方取次となっていた。景直の申し出は安宅神五郎の意向によるものと考えられ、同じ頃に神五郎は、前年の三好長治自害に関する阿波・淡路情勢を本願寺に伝えており（『顕如上人文案』『和歌山市史』二九九）、遅くともこの年始めには毛利・本願寺方へ与同し、淡路の大部分が

毛利方となったと考えられる。

岩屋への警固は二月に先遣され〔萩藩閩閩録〕大多和惣兵衛『戦瀬』四八七)、三月には岩屋渡海のため諸警固衆の備後三原(三原市)集結が決定された〔萩藩譜録〕磯兼求馬『戦瀬』四九五)。また、本願寺側も紀州門徒衆に「岩屋番手」の派遣を求めている〔頭如上人文案』『和歌山』三三八)。四月、小早川隆景は播磨英賀衆との軍事行動のため「岩屋表罷居候警固」を英賀(姫路市)へ派遣することを管重勝に伝えている〔萩藩閩閩録〕大多和惣兵衛『戦瀬』五〇七)。ただし、大坂在番衆に「隙明候者頼可差上候」と述べており、岩屋警固衆の当初の目的ではなかった。

三好長治敗死後の阿波は、守護家細川真之のもとに一旦まとまっていたが、五月に入ると矢野駿河守方と一宮成相方との対立が顕在化し内乱に突入する。¹⁷⁾この際、淡路衆が矢野方の勝瑞(藍住町)に入城しており、矢野駿河守らは、淡路安宅氏を仲介に紀州(雑賀衆)へ支援を要請し、これを味方に付けている〔昔阿波物語〕¹⁸⁾。七月下旬に矢野駿河守は毛利氏へ神文を提出して与同を示しており〔吉川家文書之二』一二六八)、淡路国衆は雑賀衆とともに阿波の毛利方を支援していく。

「大坂・岩屋・阿・讃」より度々に及ぶ警固派遣要請を受けた毛利氏は、諸警固衆を七月二十日に讃岐へ渡海させて、「一城」(元吉城)を確保して安定化させた上で、「其俣岩屋」に上着し雑賀衆と連携する軍事行動を決定した〔冷泉家文書』『戦瀬』五一四・五一五、「真乗寺旧蔵文書』『和歌山』三六六)。秋には阿波で矢野方の淡路衆が一宮成相と戦闘に及んでおり〔昔阿波物語〕¹⁹⁾、淡路衆の阿波加勢にあたって、後背地の岩屋への毛利勢駐留が求められた可能性もある。

しかし、岩屋への警固衆派遣は、閏七月二十日に発生した讃岐元吉合戦²⁰⁾とその戦後処理の影響で遅延する。十月段階で「春以来之約諾」として周防警固衆の冷泉元満の淡路派遣が決定されたが〔萩藩閩閩録〕児玉惣兵衛『戦瀬』五三二)、翌月には秀吉の播磨侵攻に対応するため、元満は他の警固衆と共に播磨英賀で活動しており、そのまま播磨沿岸にて越年したようである〔冷泉家文書』『戦瀬』五三八・五四一)。織田・毛利戦争が本格化する中で、淡路は大坂支援に加え、播磨や阿波へ淡路衆・雑賀衆が加勢を行う拠点としても機能していくが、当初予定されていた岩屋への本格的な軍勢派遣は讃岐や播磨の軍事情勢によって実現していなかった。

二 毛利方の戦線拡大と淡路

天正六年（一五七八）二月、毛利警固衆を統率する児玉就英や冷泉元満の岩屋在番が決定されており（萩藩閥閥録）²¹ 児玉惣兵衛「冷泉家文書」「戦瀬」五五二・五五四）、前年実現しなかった警固衆の派遣と考えられる。また、足利義昭側近の小林家孝も派遣され、小早川氏重臣の井上春忠らが「洲本兵糧之儀」を談合している（「浦家文書」「戦瀬」四三二）²²。洲本は紀淡海峡に近く、雑賀衆と連携した大坂への兵糧供給地として機能していた可能性が考えられよう。

三月、別所長治ら播磨国衆が与同したため、毛利氏は諸警固衆を岩屋に渡海させて「阿・淡・雑賀・大坂」と連携した軍事行動を計画し（冷泉家文書「戦瀬」五六〇）、下旬には「芸州衆歴々」が岩屋に着陣して雑賀警固衆との「撰・播之間」への軍事行動に備えた（鷲森別院文書「戦瀬」五六三・五六四）。四月初めに毛利方警固衆と雑賀衆は、播磨別府表阿閉要害（播磨町）を攻撃し（黒田家文書「戦瀬」五六六・五六七）、その後は紀州門徒衆の「岩屋渡海之衆」や冷泉元満が播磨高砂（高砂市）に在陣して織田方と対峙している（「顕如上人文案」「冷泉家文書」「戦瀬」五七四・五七八）²³。七月には織田方の大船による木津浦封鎖が行われ（鷲森別院文書「和歌山」三八九）、毛利氏は八月に「木津川口懸船行」のため再び児玉就英の岩屋在番を決定する（萩藩閥閥録）²⁴ 児玉惣兵衛「戦瀬」五八五）。

一方、織田方の長宗我部氏は、阿波三好氏を支援する雑賀衆や淡路衆について「淡州、紀州遺恨」と認識し、織田方に対し淡路か雑賀への攻撃を求めている（「石谷家文書」二九）²⁵。織田方にとって淡路は、大坂湾制海権のみならず東四国の制圧の上でも課題であった。

〔史料2〕「末国家文書」「山口」一〇六三頁

慇一筆申入候、仍撰州表就調略之儀、我等至境目罷出候、然者当御番衆内末国左馬助方以馳走可有同道之由候条、²⁶ 同心候、彼条於相調候、末国方事をも一廉御褒美肝要候、内々彼仁事無二之馳走候、数度難渋之時も御弓矢ノ於御

用ニ立儀者、可捨壹命之由、無其隱候、於此子細者、御番衆就中清水長左衛門尉方淵底存候間、可被申入候、何も行相調自是御吉相可申候、返々末国方事向後候条、能々可被付御心事肝要存候、自是可申入候、恐々謹言、

(天正六年)
十月十四日 家孝(花押)
(切封ウラ書)
「(墨引) 小林民部少輔

小早川左衛門佐殿

口羽下野守殿

家孝

福原出羽守殿

御宿所

」

岩屋在番の義昭側近小林家孝が、荒木村重らの調略などにおける「当御番衆内」(岩屋番衆)末国元光の功績を毛利氏重臣に伝えた書状である。岩屋を拠点とした畿内の織田方への調略や、備中有力国衆の清水宗治の岩屋在番が確認でき、岩屋確保のため毛利氏分国の国衆が動員されていたことが窺える。⁽²⁵⁾

村重の与同以降、撰津尼崎(尼崎市)・花熊(神戸市)には毛利勢や雑賀衆が在番し、「牛尾家文書」「鳥取」一一四五、「中村家文書」「和歌山」四〇四など)、撰津の戦況は岩屋を経由して毛利氏に報告されており、「末国家文書」「山口」一〇六三頁)、反織田方における岩屋の重要性はさらに高まっていく。

淡路国内では十二月に「志知之事令一着、安宅方被属本意候」と、志知(南あわじ市)の野口長宗を安宅神五郎が排除しており、淡路全体が毛利方のもとに平定された(「古簡雜纂」⁽²⁷⁾)。野口氏の拠点は古代以来の淡路の中心地であった三原平野⁽²⁸⁾の西部であり、同平野東部へ進出していた安宅氏との対立が発生していたと思われ⁽²⁹⁾。後述するように淡路を追われた野口長宗は羽柴秀吉を頼ることとなる。

〔史料3〕「乃美文書」「戦瀬」六〇六

去月廿三日、以早船遂注進候、其後も数度申上候処、終無御左右候、無御心許存計候、

一信長昨日五日有岡表へ被相動、今日至^(撰津)尼崎手遣之由候、定明日ハ此表へ可被打下候乎、兎蔵も爰許へ被罷越候、人数をハ尼崎へ被指上候、自大坂も井民被罷越候へとも、無人之由にて、弥加勢之儀被申候、爰許も無人之儀候間、不及才覚候、有岡・尼崎之儀、無心許迄候、信長俄出張之事、調略候哉と普申事にて候、兎角御人数御上せ御延引候て、此口可及大破候、最前以来重畳申子袖候、自敵方ハ種々行仕二、旧冬以来之儀二候処、至于今^(花押)当城尼崎への御番衆さへ無御上着候、此口被指捨候哉と下々疑候て、有岡・尼崎之事、無正躰候、為御分別候、恐惶謹言、

少輔四郎

^(天正七年)
三月六日

^(九卷)
盛勝(花押)

神五殿

御申之

撰津花熊に在陣していた小早川警固衆乃美盛勝の書状である。二月二十三日の早船による注進以降「神五殿」から返事がないことを案じ、撰津方面の戦況や尼崎・花隈の「無人」やそれに起因する「下々疑」を伝え、軍勢派遣を求めている。宛所の「神五殿」は、大坂湾周辺の人物と考えられることから岩屋在番中の安宅神五郎ではないだろうか。毛利氏が撰津の対織田戦にも淡路国衆を動員していたことが窺える。なお、本書状は乃美家伝来であり、実際には発給されなかつたようである。書状を発給する前に音信あるいは加勢派遣があつたとも推測できよう。

五月には播磨三木城(三木市)に兵糧などを補給するため、岩屋・兵庫にて「小船之仕組」が命じられている(「乃美文書」『戦瀬』六一二)。また、荒木村重は小早川隆景の「岩屋御着岸」を求めており(「萩藩閩閩録」桂善左衛門『戦瀬』六〇九)、撰津への戦線拡大に伴って岩屋の役割も増していく。

〔史料4〕「末国家文書」二二五「山口」一〇六四頁

態令啓候、末国左馬助殿去年以来爰元御在城御辛勞不及是非候、奉対〔毛相〕輝元御忠義与乍申、別而被煎肝候条、是等之趣宜御取合專要存候、拙者無二之覚悟、末左淵底御存知之儀候、弥々不可存疎意候条、於時宜者可御心易候、将亦従、輝元数度預御合力忝存候、乍恐可然様ニ御取合所仰候、随而ハ直家逆心ニ付而、彼表御行之由候、定落居不可有程候歟、上口御味方中無不慮様ニ御心付此節候、於趣者兎蔵太・乃兵可被得御意候、此表上辺様子末左可為御演説候条、不能具候、恐々謹言、

菅加賀守入道

〔天正七年〕十月十五日 重勝（花押）

福原出羽守殿

□羽下□□□まいる「下」

岩屋在番の末国元光の下国に際し、菅重勝は毛利氏重臣に「無二之覚悟」を伝え、「上口御味方中無不慮様」に加勢継続を求めている³⁰。秋に離反した宇喜多直家への対応で、岩屋周辺の軍事力低下を恐れたものである。菅重勝にとって、岩屋を拠点に毛利勢が畿内周辺に展開され、反織田勢力が維持されることが自領の安全につながっていた。

十一月に有岡城が落城すると、翌月には花熊の毛利勢などが下国する事態が発生する〔萩藩閩閩録〕桂善左衛門「戦瀬」六六六³¹。毛利氏は岩屋へ警固を派遣し、備前方面へ「此比休息候て罷居候警固之者共」や冷泉元満³²の派遣を決定した〔冷泉家文書〕「戦瀬」五四四³³・六二六。毛利氏の海上軍事力は岩屋を拠点に東瀬戸内海の広域で展開されたが、宇喜多氏離反以降は戦線の維持が次第に困難になっていく。

三 毛利氏の劣勢と淡路

天正八年（一五八〇）一月、播磨三木落城直前に毛利氏の「諸警固并尼崎番衆中悉被罷下候」事態が発生し、本願寺方による大坂・尼崎・花熊の確保が危ぶまれたが、児玉就英が岩屋在番を続けたために持ちこたえた（「萩藩閩録」児玉惣兵衛「戦瀬」六二九）。ただちに児玉就英と交替する在番衆として冷泉元満らの派遣が決定されたものの、その到着は遅延を重ねた。

三月に毛利氏は、安宅神五郎や菅重勝から岩屋への早期派遣を要請され、小早川警固衆を派遣し、冷泉元満に早急な上国を催促していたが（「冷泉家文書」『戦瀬』四九九）³⁴、「岩屋不慮」とされる事態が発生する（「藩中古文書」村上小四郎藏『戦瀬』五〇〇）³⁵。冷泉らの到着前に児玉就英が岩屋から下向したため「不慮必定」と予想されたが、菅重勝の「無二之覚悟」によって岩屋は維持された。毛利氏は「諸警固之儀、追々至岩屋差上候、尼崎・花熊弥以自寺内被付御心候様、可申述事肝要候」と岩屋への諸警固派遣によって本願寺の動揺を抑え、大坂衆による尼崎・花熊の保持を意図した（「萩藩閩録」大多和惣兵衛『戦瀬』六三九）。しかし、児玉就英の下国後も安宅神五郎・菅重勝が「神文等」を提出して加勢派遣を求めたにも関わらず、閏三月になっても少数の小早川警固衆の上着のみで冷泉らの到着は延引していた（「冷泉家文書」『戦瀬』六四三）。同月に本願寺は信長と和談に及ぶが、大坂退去の一因として「中国衆之儀、岩屋・兵庫・尼崎引退帰国」を挙げている（「勝興寺文書」『和歌山』四三七）。畿内の反織田勢力が抗戦を継続する上で、岩屋への毛利勢駐留は不可欠であったが、早期の実現に至らず本願寺の動揺を抑えることはできなかった。

この頃、羽柴秀吉は淡路を追われた野口長宗を取次として、阿波の反三好勢力に淡路出兵時の馳走を求めている（林原美術館所蔵「古判手鑑」『戦三』一九二四）。本願寺との和陸を受けて、制海権掌握の課題であった淡路攻略を計画したのであろう。菅重勝や安宅神五郎は、このような織田方の淡路攻撃を懸念して、毛利勢の早急な派遣を求めていると考えられる。大坂では「近年山越を取、妻子を育候雑質・淡路島之者共」が「爰を取離れては、迷惑と存知」、教如を擁立した（『信長記』十三）。織田方の攻撃を回避するために、淡路衆は大坂を維持する必要があったのである。

四月下旬の段階で、岩屋に派遣される予定だった冷泉元満や川内警固衆の香川光景は、備前児島周辺まで到着していたが、「御同心之衆無人之由咲止候」という状態であった（『冷泉家文書』『戦瀬』五六九・五七〇）⁽³⁶⁾。天正四年から打続く遠国への動員で警固衆に軍役忌避が広がっていたと見られる。同月末、小早川隆景は岩屋・洲本へ警固として児島衆を派遣し、手薄になった常山など児島の諸城に備中の明石兵部大輔の入城を求めている（『黄薇古簡集』⁽³⁷⁾）。毛利氏は与同勢力の求めに応えるため宇喜多氏との境目の軍勢動員をも余儀なくされていた。

岩屋に着陣した冷泉元満らは、六月下旬に「花熊拘様之儀」について雑賀衆渡辺藤左衛門尉の使者を小早川隆景に取次しているが（『冷泉家文書』『戦瀬』六五五）、七月には花熊が落城し、岩屋では「屋代・河之内警固之者共替不待付下向」との事態が発生する（『冷泉家文書』『戦瀬』六五六）。毛利氏は冷泉元満らに対し、交替の到着まで小林家孝・菅重勝と協力した堅固な在番を求めている（『冷泉家文書』『戦瀬』六五七）。しかし、花熊落城や岩屋からの毛利警固衆撤退により教如は八月に大坂を退去し、大坂在番の毛利勢も帰国した（『萩藩閩閩録』大多和惣兵衛『戦瀬』六五九）。大坂退去に際し、雑賀・淡路島からの迎船が「近年相抱へ候端城之者」などを収容している（『信長記』十三）。

〔史料5〕「冷泉家文書」『戦瀬』五八三⁽³⁸⁾

就今度大坂不慮之儀、某元御心遣令察候、両度之御書中慥到来、得其心候、先度南源右土上せ進之候条、委細可申入候、洲本覚悟、弥承届候而、某許拘様等、猶以可令其短束候、南源下着五日雖相待候、遅々候条、左候へ者旁江御見舞緩二罷成候間、先此者共差上候、自吉田被仰付候警固衆等、遅延不及是非候、乍去於于今者、聽而可為上着候、此者共之事、依御内儀、五日十日程者可罷居之由申付候、猶木原善右衛門尉二申合候条、不能詳候、恐々謹言、

左衛門佐

（天正八年）八月十六日 隆景（花押）

冷泉民部少輔殿

香川左衛門尉殿^(光景)

御陣所

小早川隆景は、大坂退去に伴う冷泉元満・香川光景からの度々の報告に対し、安宅神五郎の「覚悟」を確認し、淡路の維持に向けた準備、当初より遅延したものの交替の警固衆の派遣を伝えている。⁽³⁹⁾以降、淡路に関する毛利方の史料は管見に及ばないが、冷泉らの下国後も毛利方警固衆の岩屋在番はある程度継続していたと考えられる。また、次に触れるように、大坂を退去した軍勢の淡路駐留も想定できる。

大坂を退去した牢人衆や雑賀衆・淡路衆は、十一月下旬までに長宗我部方が確保していた阿波勝瑞を占拠して二宮城（徳島市）を包囲した。長宗我部元親はこの情勢を羽柴秀吉に知らせる中で、秀吉が「馳参」った野口長宗を「御許容」したことを聞き、淡路への対応を確認している。また、織田方が「紀州之儀被押置」れば阿波・讃岐をすぐに制圧でき、その後は淡路について「被仰下次次第可致心懸候」と淡路出兵への協力を申し出ている（『吉田文書』『戦三』参考一三九）。牢人衆らの行動は長宗我部氏優勢であった阿波の軍事情勢を一変させており、その渡海拠点と思われる淡路の情勢に元親が敏感になっていることが看取できる。淡路の攻略は、織田氏による制海権掌握のみならず、⁽⁴⁰⁾東四国制圧を目指す長宗我部氏にとっても依然として課題であった。

讃岐へ逃れていた三好義堅は天正九年一月に阿波勝瑞へ帰還し、その後九月までに、淡路郡家（淡路市）の田村氏とともに一宮城を包囲しており（『昔阿波物語』）、淡路国衆による阿波三好氏支援が継続していた。⁽⁴¹⁾なお、『兵庫県史』などでは、六月に毛利勢が岩屋を再攻略したとするが、美作岩屋（津山市）の誤認である。

〔史料6〕「蜂須賀文書写」『戦瀬』六一九

去晦日注進状、今日六到来、委曲聞召候、

一敵警固船二百艘計罷上之处、則其方令案内、自室小西安宅乗出、至家嶋^(播磨)追上之旨、尤以神妙候、尚々無由断可調

儀事専一候、

(二条略)

十一月六日(天正九年) 御黒印(織田信長)

蜂須賀彦右衛門尉とのへ

十月晦日の蜂須賀正勝からの注進状によれば、「敵警固船二百艘計」を「室」から「小西安宅乗出」し、播磨家島まで追撃している。尾下成敏氏は、「室」を播磨室津（たつの市）ではなく淡路室津（淡路市）とし、毛利方警固船を小西行長と安宅氏が迎撃したとする。⁽⁴²⁾しかし、後述するように十一月中旬の織田勢による淡路制圧では、安宅神五郎の州本は織田勢に包囲されており、それ以前に小西行長と軍事行動を共にしていたとは考えにくい。「自室小西安宅乗出」は、室から小西行長が安宅船で出動したことを示しているのではないだろうか。この場合「室」は播磨室津であろう。毛利方警固衆の目的は定かではないが、「二百艘計」は事実であれば警固衆の規模として小さくない。十月二十三日に秀吉は、播磨明石（明石市）の警固衆石井氏などに「淡州岩屋船五十七艘」の分国中における「灘目廻船往来」を認めており（「横尾勇之助氏所蔵文書」『秀吉』⁽⁴¹⁾三四七など）、領内の船方に織田方の保護を求める動きが顕在化する中で、菅重勝が毛利氏に加勢を要請し、与同国衆を保護すべく毛利氏が警固衆を派遣した可能性を想定できる。⁽⁴⁶⁾しかし、織田方の迎撃により淡路への毛利氏支援は断たれる。これが淡路攻略の前提になつたのではないだろうか。

十一月中旬、伯耆から姫路へ帰陣した秀吉は、摂津の池田元助とともに淡路に出陣する。十六日に秀吉は、先勢として岩屋周辺に渡海した生駒親正に「いわず城不謂儀不相渡候へ者、御まハし可申候」と指示しており（「吉武文書」『秀吉』三五六）、先勢渡海時において、菅重勝は織田方に服属していなかった。『信長記』十四には、十七日に羽柴・池田勢が「岩屋へ取り懸け、攻め寄せしのところ、懇望の筋目侯て、池田勝九郎手へ岩屋を相渡し、別条なく申し付く」とあり、菅重勝は池田勢に岩屋を明け渡した。⁽⁴⁷⁾

〔史料7〕「古文書纂」『秀吉』三三五七

書状委細披見候、仍淡州之儀十六日七日先勢差遣、十八日二我等令渡海、所々令放火、洲本迄押詰候処、始（羽後）安宅各令懇望候条、則人質等取置候て召置、野口孫五郎（孫五郎）をも本之在所三原之古城普請等申付入置、一国平均五三日之中二申付昨夕廿一日至姫路令開陣、於時宜者可心易候、早々音信令祝着候、随而腫物煩之由無心許口〔候〕、能々養生肝要候、恐々謹言、

藤吉郎

（天正九年）

十一月廿二日 秀吉（花押）

桑山修理進殿

進之候

淡路に渡海した秀吉は、所々を放火し、州本城を包囲したところ、安宅神五郎などが「懇望」したため人質を徴収した。安宅神五郎も織田勢渡海前まで敵対の姿勢を崩していなかったと考えられよう。さらに秀吉は保護していた野口長宗を「本之在所三原之古城」（志知城）へ普請を命じて入城させている。⁽⁴⁸⁾

織田勢渡海直前まで菅重勝や安宅神五郎は服属の姿勢を見せていなかったが、毛利氏支援の見込みがない状況での攻撃により服属を判断し、短時日で淡路は制圧された。岩屋には「撰州之池田勝三郎者」が、州本には「筑前者」が「入置」されたが（『福屋金吾日記文書』『鳥取』一四九〇）、「淡路島物主」は未定であり（『信長記』十四）、野口長宗の旧領復帰を除いて、菅重勝や安宅神五郎らの本知は安堵されたと思われる。⁽⁴⁹⁾ なお、野口長宗の取次は天正八年以降の関わりから秀吉が務めている（『野崎文書』『戦三』一九二〇）。

淡路制圧により、織田方による阿波・讃岐攻撃が可能となり（『志岐文書』『戦三』一九一九）、淡路の性格は阿波三好氏を攻撃する橋頭堡へと変化した。⁽⁵⁰⁾

天正十年三月に秀吉は、宇喜多氏を救援するため、警固船として「あち舟・くき舟」や播磨の「諸浦之舟共」を動員

する〔岡本文書〕『戦瀬』六〇五⁽⁵¹⁾。淡路制圧により九鬼警固衆や淡路の警固衆を動員した本格的な海上軍事行動が可能になったようであるが、備前児島の日比(玉野市)・下津井(倉敷市)に進出した「上警固」「二百艘」について、毛利氏は「船数等不甲斐二候之条、不可有珍儀候歟」とさほど脅威とはしていない(「屋代島村上文書」「藩中古文書」村上小四郎藏『戦瀬』六八四・六八六)。淡路警固衆を含めた織田方海上軍事力は、毛利氏のそれに対抗しうるものではなく、秀吉は調略によって毛利方の切り崩しを計っていく⁽⁵²⁾。

五月上旬、信長は阿波・讃岐の四国国分案を示しすとともに自身の淡路出馬を表明し(「寺尾菊子氏所蔵文書」『戦三』一九二五)、三好康長が先勢として阿波に渡海する(『元親記』⁽⁵³⁾)。当然、淡路衆は四国出兵にも動員されたと考えられる⁽⁵⁴⁾。

おわりに

織田・毛利戦争において淡路は、毛利方の摂津・播磨・阿波における反織田勢力への支援拠点、雑賀衆との連携拠点として機能し、主に岩屋への毛利勢在番による安定的な確保が重視された。菅重勝や安宅神五郎ら淡路国衆の側も、自領の安全を確保すべく毛利勢の淡路駐留を求めるとともに、雑賀衆と連携して大坂や阿波へ渡海し反織田勢力を支えていた。しかし、戦線の拡大と戦争の長期化により、岩屋周辺における毛利勢の在番態勢は弛緩し、反織田勢力は崩壊していく。菅重勝や安宅神五郎は本願寺の大坂退去後も岩屋への毛利勢派遣を求め続けたが、織田氏の攻撃を受けるに至りこれに服属する。その後、淡路の海上軍事力は秀吉の中国攻めに動員され、淡路は織田氏の四国進出の橋頭堡へと変化していく。このような織田権力末期における淡路の位置付けは、羽柴権力に引き継がれ、阿波・讃岐における反長宗我部方勢力の支援拠点及び四国出兵の渡海拠点として機能していく。さらに、淡路は秀吉の本拠地となった大坂の安全保障上の要地として、東四国の政治・軍事情勢と絡みながら直臣の配置による掌握が進むとともに、織田権力期に温存された国衆は転封されていく。今後は、羽柴権力の淡路掌握と四国国分の展開を関連付けながら検証していきたい。

註

- (1) 太田宏一「雑賀渡海衆―石山合戦期を中心として―」(『和歌山市立博物館研究紀要』一四、一九九九年)、橋詰茂「織田権力の瀬戸内海制海権掌握」(同著『瀬戸内海地域社会と織田権力』思文閣出版、二〇〇七年、初出二〇〇〇年)、小川雄「織田政権の海上軍事と九鬼嘉隆」(『海事史研究』六九、二〇一二年)など。
- (2) 尾下成敏「羽柴秀吉勢の淡路・阿波出兵―信長・秀吉の四国進出過程をめぐって―」(『ヒストリア』二二四、二〇〇九年)、藤井讓治「阿波出兵をめぐる羽柴秀吉書状の年代比定」(『織豊期研究』一六、二〇一四年)。
- (3) 渡辺世祐監修『毛利輝元卿伝』(マツノ書店、一九八二年、初出一九四四年)、八一―三九頁、二二七―三三〇頁。
- (4) 『兵庫県史 通史編 第三卷』(一九七八年)、七一〇―七一五頁。
- (5) 光成準治「高松城水攻め前後の攻防と城郭・港」(『倉敷の歴史』一八、二〇〇八年)、山本浩樹「織田・毛利戦争の地域的展開と政治動向」(川岡 勉・古賀信幸編『西国の権力と戦乱』清文堂出版、二〇一〇年)など。
- (6) 『和歌山市史 第四卷 古代・中世史料』(一九七七年、『和歌山』と略)、『兵庫県史 史料編 中世一』(一九八三年、『兵一』と略)、『兵庫県史 史料編 中世九・古代補遺』(一九九七年、『兵九』と略)、『山口県史 史料編 中世三』(二〇〇四年、『山口』と略)、土居聡朋・村井祐樹・山内治朋編『戦国遺文 瀬戸内水軍編』(東京堂出版、二〇一二年、『戦瀬』と略)、天野忠幸編『戦国遺文 三好氏編 第三卷』(東京堂出版、二〇一五年、『戦三』と略)。
- (7) 柴裕之「織田・毛利開戦の要因」(『戦国史研究』六八、二〇一四年)、森脇崇文「天正初期の備作地域情勢と毛利氏・織田氏」(『ヒストリア』二五四、二〇一六年)。
- (8) 天野忠幸「三好長治・存保・神五郎小考」(『鳴門史学』二六、二〇一三年)。
- (9) 弘治三年(一五五七)に菅加賀守元重が三立崎庄妙勝寺(淡路市)へ田地を寄進している(『妙勝寺文書』『兵一』五二四頁)。
- (10) 柴辻俊六・黒田基樹・丸島和洋編『戦国遺文 武田氏編 第六卷』(東京堂出版、二〇〇六年)四〇八三。
- (11) 天正六年に比定する見解もあるが、安宅神五郎の織田方と同や高砂梶原氏への別所長治の攻撃など天正六年の情勢と齟齬する点が多い。

- (12) 前掲註(1) 小川論文。
- (13) 六月十七日に井上春忠・乃美宗勝ら小早川警固衆が備後駒を東上している(『伊勢參宮海陸之記』、山内讓『中世 瀬戸内海の旅人たち』吉川弘文館、二〇〇四年、一三六・一三七頁)。
- (14) 岡山大学池田家文庫等刊行会編『信長記』(福武書店、一九七五)。
- (15) 『新鳥取県史 資料編 古代中世1古文書編上』(二〇一五年、『鳥取』と略)。
- (16) 奥野高広『船越景直の生涯―乱世の処世術―』(日本歴史学会編『歴史と人物』吉川弘文館、一九六四年)。
- (17) 森脇崇文『足利義昭帰洛戦争の展開と四国情勢』(地方史研究協議会編『徳島発展の歴史的基盤―「地力」と地域社会―』雄山閣、二〇一八年)。
- (18) 『阿波国徴古雜抄』(日本歴史地理学会、一九二三年)、六四〇―六八七頁収録。
- (19) 安宅市之助が一宮方の伊予衆妻鳥采女と戦闘して討死している。
- (20) 川島佳弘『元吉合戦再考―城の所在と合戦の意図―』(四国地域史研究連絡協議会編『四国の中世城館』岩田書院、二〇一八年)、同「天正五年元吉合戦と香川氏の動向」(橋詰茂編『戦国・近世初期 西と東の地域社会』岩田書院、二〇一九年)。
- (21) 『戦瀬』などでは天正元年に比定されるが、小林家孝の動向や警固衆の動員の様子から天正六年と判断した。
- (22) 冷泉元満は加古川(加古川市)在陣の織田信忠勢と対陣しており、雑賀衆と共に高砂に在番していたと考えられる。
- (23) 浅利尚民・内池英樹編『石谷家文書 將軍側近のみた戦国乱世』(吉川弘文館、二〇一五年)。
- (24) 藤田達生「織田政権と謀叛」(『ヒストリア』二〇六、二〇〇七年)では、「御番衆」の記述から、末国元光・清水宗治を幕府奉公衆とするが、書状の趣旨は末国元光の功績について「御番衆」の清水宗治も詳しく知っているといることであるから、「御番衆」は岩屋番衆のことであろう。
- (25) 天正五年十二月には、備中の石蟹氏・伊達氏の岩屋在番が確認できる(『吉川家中并寺社文書』『鳥取』一一二二)。
- (26) 国会図書館蔵『古簡雜纂七、八』。藤田達生『証言本能寺の変―史料で読む戦国史―』(八木書店、二〇一〇年)四五頁。
- (27) 天正四年十一月十日松本村伊勢宮棟札に「大檀那野口孫五郎長宗」とある(小西友直・錦江編著『味地草』第四冊、名著出版、一九七二年、七四頁)。
- (28) 小川信「淡路府中・守護所と港津」(同『中世都市「府中」の展開』思文閣出版、二〇〇一年、初出一九八五年)。

- (29) 前掲註(27)『味地草』第三冊(二二九頁)には津名郡下塚村(洲本市)の里正所蔵の古記が所収されており、洲本安宅氏と野口氏が度々合戦したこと、家老の野口孫作が洲本安宅氏へ離反したため志知城が落城し、野口氏は秀吉を頼ったことが記されている。また、山上雅弘「淡路の港津と政治拠点」(中世都市研究会編『港津と権力』山川出版社、二〇一九年)は、戦国期に洲本の政治拠点化が進み、三原平野の中心的機能が相対的に低下したと指摘する。なお、三月に毛利氏が相談していた「洲本兵糧之儀」との関係も考えられよう。
- (30) 十月十四日付で小林家孝も同内容の書状を発給している(『末国家文書』「山口」一〇六四頁)。
- (31) 大坂退去前の内容から天正七年に比定した。
- (32) 冷泉元満は十一月に「岡山押」として備前庭妹(岡山市)周辺への警固を求められている(『冷泉家文書』『戦瀬』六二〇)。
- (33) 四畝城攻めの内容から(前掲註(5) 山本論文)、天正七年に比定できる。
- (34) 冷泉の岩屋派遣をめぐる関係史料から天正八年と判断した。
- (35) 児玉就英の岩屋下国や「大坂不慮」の文言から天正八年と判断できる。なお、本書状は穂田元清・乃美宗勝宛であるが、来島村上氏重臣の村上吉継の家伝文書に所収されている。入手の経緯は不明であるが、岩屋をめぐる毛利方不利の情報が吉継の秀吉方接触(『藩中古文書』村上小四郎蔵『戦瀬』六四一・六四二)につながった可能性も考えられる。
- (36) 冷泉元満・香川光景宛の書状は一連のものと判断し天正八年に比定した。
- (37) 『岡山県の中世文書—黄薇古簡集—』(戎光祥出版、二〇一六年)、二六八頁。備前児島の手簿を心配している内容から天正八年と判断した。
- (38) 冷泉・香川宛と「大坂不慮」から天正八年に比定できる。
- (39) これ以前に岩屋には毛利方の安宅船が繋留されていたようである(『冷泉家文書』『戦瀬』五八四)。
- (40) 前掲註(1) 小川論文。
- (41) 前掲註(5) 山本論文。
- (42) 名古屋博物館編『豊臣秀吉文書集 一』(吉川弘文館、二〇一五年、『秀吉』と略)。
- (43) 前掲註(2) 尾下論文。
- (44) 前掲註(1) 橋詰論文。

- (45) 文安二年(一四四五)に兵庫北関を通関した「木舟」は讃岐引田に次いで岩屋船籍が多く、明石海峡沿岸の海運が盛んであったと思われる。(前掲註(28) 小川論文)。
- (46) 十月下旬に毛利氏は宇喜多方の備中忍山城を攻略しており、山陽方面では優勢であった(前掲註(5) 山本論文)。
- (47) 谷口央「八月五日付生駒親正宛(羽柴) 筑前守秀吉書状について」(『松代』三一、二〇一八年)では、淡路制圧時に岩屋方面に配置されていた生駒親正が、八月段階で鳥取城攻めに同陣せず瀬戸内方面にいたことから、秀吉が八月段階で淡路攻撃を念頭に置き、生駒を淡路方面に配置していたとする。しかし、根拠となる八月五日秀吉書状に淡路を示す文言はなく、生駒は蜂須賀正勝と同様に播磨で留守を任されていたとも考えられるため、八月段階で秀吉が淡路攻略の準備をしていたとするには十分でない。なお、本論考は藤田達生氏に御教示を頂いた。
- (48) 洲本から志知に至る三原平野の掃守・保内六村小屋(上田保、南あわじ市)へ秀吉の禁制が発給されている(『淡路草』「秀吉」三六〇・三六一)。
- (49) 天正十年九月段階で「かんの加賀殿之義も御本知如前々にて候」とある(『萩原文書』「戦三」一九三九)。
- (50) 拙稿「天正前期の阿波・讃岐と織田・長宗我部関係―四国国分論の前提として―」(前掲註(20) 橋詰編著)では、淡路制圧を受けて阿波三好氏が織田氏に服属し、織田氏・長宗我部氏の境目相論が顕在化したとした。
- (51) 森俊弘「年次三月四日付け羽柴秀吉書状をめぐる―書状とその関係史料を再読して―」(『岡山地方史研究』一〇〇、二〇〇三年)の比定に従う。
- (52) 前掲註(5) 山本論文。
- (53) 山本大校注『四国史料集』(人物往来社、一九六六年)収録。
- (54) 本能寺の変直後、菅平右衛門が一時的に洲本を占領しているが(『萩原文書』「戦三」一九三一など)、中国・四国攻めに淡路国衆が動員されたことによる軍事的空白に乗じたものと考えられる。